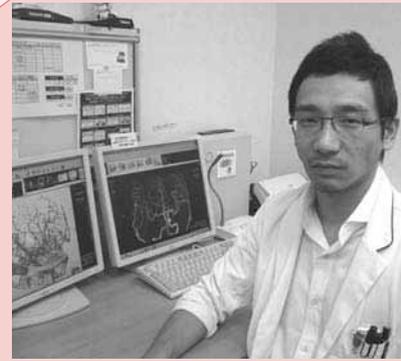


私のカルテ

No 3 4 2

突然、倒れないために

津島市民病院
脳神経外科 医師
丹羽愛知

脳は戻らない

突然、意識が悪くなり体の片方が動かなくなった。このような理由で救急車により運ばれてこられた「脳卒中」の方々を治療する際、ご家族から「突然なってしまったのでしょうか?」と聞かれることがあります。

このようなことを聞かれるご家族からは、こうなる前に何かできることはなかったのだろうかという後悔の念を感じ取られます。脳は傷がついてしまうとその部分の機能を回復させることはできません。多くの脳卒中は一旦発症してしまうと治療の目的は「元に戻す」ではなく「さらに悪くなることを防ぐ」という意味合いが強くなります。麻痺などが強く残った場合、ご本人はもちろんのこと、支えていただくご家族にも大きな負担を強めます。だからこそ脳卒中は予防しなければいけません。今回は脳神経外科の立場から脳卒中の予防に関してお話しさせていただきます。

脳卒中の原因としての生活習慣病

脳卒中とは脳の中でも脳血管に起きる病気の総称であり、代表的なものとして、くも膜下出血、脳梗塞、脳出血などがあります。その多くはいわゆる生活習慣病と言われる血管を痛めてしまう高血圧や糖尿病、脂質異常症、高尿酸血症などが原因の一つとなっています。例えば、高血圧の薬を飲まれている方はたくさんいらっしゃると思いますが、高血圧があるだけでは体調の不良はあまり感じません。高血圧は「サイレント・キラー」とも呼ばれます。血圧が高いだけで普段通りの生活をしていても、少しずつ血管にはダメージが蓄積されています。徐々に血管が狭くなったりしているわけで、それが限界に達すると血管が詰まり脳梗塞になったりします。つまり突然襲ってくる恐ろしい合併症を予防するために、日々血圧を管理しているといっても過言ではありません。



飲み薬を飲んでさえいれば安心か?

このように脳卒中を予防するためには、あくまで生活習慣病への内服治療がなされることが大前提です。またその治療が上手くいっているかどうか定期的に確認することも非常に大切です。高血圧薬を飲んでいて血圧手帳をつけていないということはありませんか? 治療をしていてもその効果を気にしていないと何のために治療をしているか判らなくなってしまいます。ですから血圧手帳をつけることと同様に、定期的に頭頸部MRIなどで血管の状態を確認することも大切です。当院でも行っている脳ドックがあるのはそのためです。もちろんMRIが全ての脳卒中を予測できるわけではありませんが、症状がないうちに脳血管の異常を早期に発見できれば、薬の変更や追加、場合によっては手術によって脳卒中を予防することができます。具体的には、大きな脳動脈瘤が見つければ、くも膜下出血の危険性があるため手術を考慮したり、脳血管が細くなっていれば脳梗塞の予防のために血を固まりにくくする内服や血管の流れを良くする手術を提案させていただきます。

病気が見つかることが怖い

「知らぬが仏」という言葉もあるくらいですから、このように割り切れるのであればそれはそれで良いと私は思います。しかし、どこかで心配な気持ちがあるならば、相談していただければ力になることができます。目に見えないものほど怖いものです。例えば病変が見つかったとしても、多くは経過観察や内服治療の対象となり、必ずしもいきなり手術になるわけではありません。また例えば右の脳血管が細くて脳梗塞になりやすいことがわかれば、症状は左側に出来ますので、左半身が何かおかしければすぐに病院に行かなければいけない、といった風に普段の生活で注意しなければいけないことも見えてきます。病気が見つかることは怖いことですが、適切に対応すれば何とかできます。病気への不安は私達が治療の道筋を立てることで、なくしていきます。ですので、脳卒中が心配でしたら脳ドックで検査してみるのも良いかもしれません。